

〔余の寫生帖〕

孤 筆 生

雲行き水流るゝと云ふ様な神品こそ無いけれども、忠實を主として畫いたる我寫生帖は、まこと我が寶である否、我無二の友として愛藏してゐるのである、僅か三十五枚の小寫生帖は自分の魂である、或は山水の勝區もあり或は美しき花草、さては平和なる夕や靜かなる朝の面影も存して居るのである、實に此寫生帖は一つの自然である、あゝ我は此寫生帖によつて如何ばかり幸福將た慰藉を得たであらうか？ 一人淋しき寄宿舎の窓になつかしき故郷の山川に接して笑つたではないか……其第一枚には何が畫いてあるか？ 白梅である、白梅の繪があるのである、春未だ寒い頃の日曜日のものであつた、親しき友と郊外散策の折、とある路邊の白梅の、いと趣味あるが捨て難いまゝに拙なき筆を運ばせたはこれである點景人物の子守。心地よいコバルト色の天空、自分ながらよく出來たものと思つて居る。

オは寫生帖をはなした事は無いと云ふ事であるが私も實に其通りである愛弟愛妹を連れて行かない處へも我寫生帖は連れて行く、彼は束の間も我ポテターをはなれた事はない、彼は何時も我ポツケットのの中に在つて我のお供をして居るのである。春も最早や中頃とはなつた今井ヶ迫の桃花も昨今満開です、我は日朗らに天うらゝかなる日を撰んで春の永日を樂しき寫生に指を染めん事を期して居るのである。

〔セツ／＼と勉強〕

山梨縣 宮澤 野 煙

僕の業は織物で有るから其れの意匠等を物する上に於ても畫とはどうしても蜜接の關係を有して居る、先年織物視察として桐生足利地方を巡遊した折、廻り廻つて桐生織物學校へ立寄つた、其時圖案室で見たのが英國や佛蘭西から購入したと云ふ水彩畫で、花鳥山水等を描いた實に立派の者であつた、始めて夫れを見た僕は、あゝ自分も願くば繪具を以つてこゝ云ふ風に實態を寫して見たい者だとむら／＼と此時に感を湧かした、其後程經て本屋で見附たが彼の大下先生の水彩畫階梯、僕は夫れて道具立をなし着色法を覺えた、サー、始めて見ると甘く行ぬは／＼實際思ふ百分一にも及ばない、が夫れ以來は何よりの樂としてセツ／＼と勉強して居る。

〔この美しい繪に〕

長崎 田内 眞隆

僕が水彩畫を學び初めたのは實に子供らしい競争心から起つたので、それは昨年即ち中學校の二年生の時であつた。何故僕が左様に早く水彩に手をつけたかと云ふと、其れは僕と同クラスにB氏と云ふよくかく者が居たが、いつも美しい繪を持つて來るので實に羨望に堪へなかつた。然し其時はまだ自身かくと云ふ心はなかつたが、ある時校内で繪畫の展覽會があつた其時、出品せられたのは多くは水彩畫であつた。僕は此の美しい畫に接すると直ちにある一種の競争心が起つたのである。其れからといふものは、嘗て羨望と嫉妬とて見て居た水彩畫を學び初めた。嗚呼僕はかやうな動機よりして遂にある越味を感得する事が出來たのである。

次は何であらう？云ふまい、言はぬが花があるものを、かくして我の寫生帖は日に日に畫が多くなつて行くのである、彼の大畫家コロ

が多くの寫生帖をなした事は無いと云ふ事であるが私も實に其通りである愛弟愛妹を連れて行かない處へも我寫生帖は連れて行く、彼は束の間も我ポテターをはなれた事はない、彼は何時も我ポツケットのの中に在つて我のお供をして居るのである。

僕が水彩畫を學び初めたのは實に子供らしい競争心から起つたので、それは昨年即ち中學校の二年生の時であつた。何故僕が左様に早く水彩に手をつけたかと云ふと、其れは僕と同クラスにB氏と云ふよくかく者が居たが、いつも美しい繪を持つて來るので實に羨望に堪へなかつた。然し其時はまだ自身かくと云ふ心はなかつたが、ある時校内で繪畫の展覽會があつた其時、出品せられたのは多くは水彩畫であつた。僕は此の美しい畫に接すると直ちにある一種の競争心が起つたのである。其れからといふものは、嘗て羨望と嫉妬とて見て居た水彩畫を學び初めた。嗚呼僕はかやうな動機よりして遂にある越味を感得する事が出來たのである。